

## 名作誕生 — つながる日本美術

東京国立博物館（東京・上野公園） 2018. 04. 13～05. 27



本「特別展」は、日本美術の「名作」はどのようにして生まれてきたかをテーマに、仏教美術、絵画、工芸のジャンルや時代の枠を超え、社会背景やモチーフなどの「つながり」に注目して、各種の日本の美術品を紹介している。

企画は、「朝日新聞」創刊 140 年および美術雑誌「国華」創刊 130 年を記念して、名だたる日本・東洋美術研究者が集う同誌編集委員と東京国立博物館の研究者が共同チームを編成し、作品所蔵者の協力を得て国宝・重要文化財を含む「名作約 130 件」の豪華な揃い踏みとして展示である。(会期中一部展示替えあり)

重要文化財 どうしょうだいじ 唐小堤寺 伝薬師如来立像 奈良時代・8 世紀後半



唐招提寺は奈良市内にある鑑真が建立した寺院で、南都六宗の一つの律宗の総本山で、1998 年に古都奈良の文化財の一部として、ユネスコより「世界遺産」に登録されている。

如来（にょらい）は、真如（しんじょ）の世界（仏界）からこの世に来た「仏」という意味で、特に真理を究めて仏陀となり教主とされる「仏」のことである。この「如来立像」は、鑑真在世の頃に作られたとされる像高 160.2cm の木心に木屎漆（こくそううるし）を盛り上げて造形した「木心乾漆像」で、頭・体ともに奥行きのある重厚な造りで、小ぶりの頭部はふくよかな張りを持つ頬とかなたを見る眼差しは大陸的な容貌が見られる作品である。

三井岩佐又兵衛筆 国宝「洛中洛外図屏風」(舟木本) 部分 江戸時代 17 世紀



紙本金地着色「六曲一双」の作品は、京都の市中とその周辺を描いたものの一つで、元は滋賀の船木屋に伝来したため「舟木本」の名で親しまれている。

右側に豊臣氏の象徴である「方広寺大仏殿」の偉容を大きく描き、左側には徳川氏の「二条城」を対峙させ、その間に洛中、洛東の街並みが広がって市民の生活の様子が生き生きと描写されている。